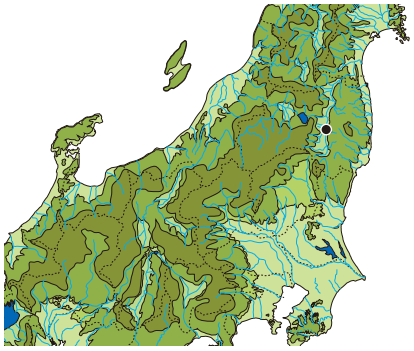
# Ⅰ 正直古墳群の概要

## (1)正直古墳群の立地

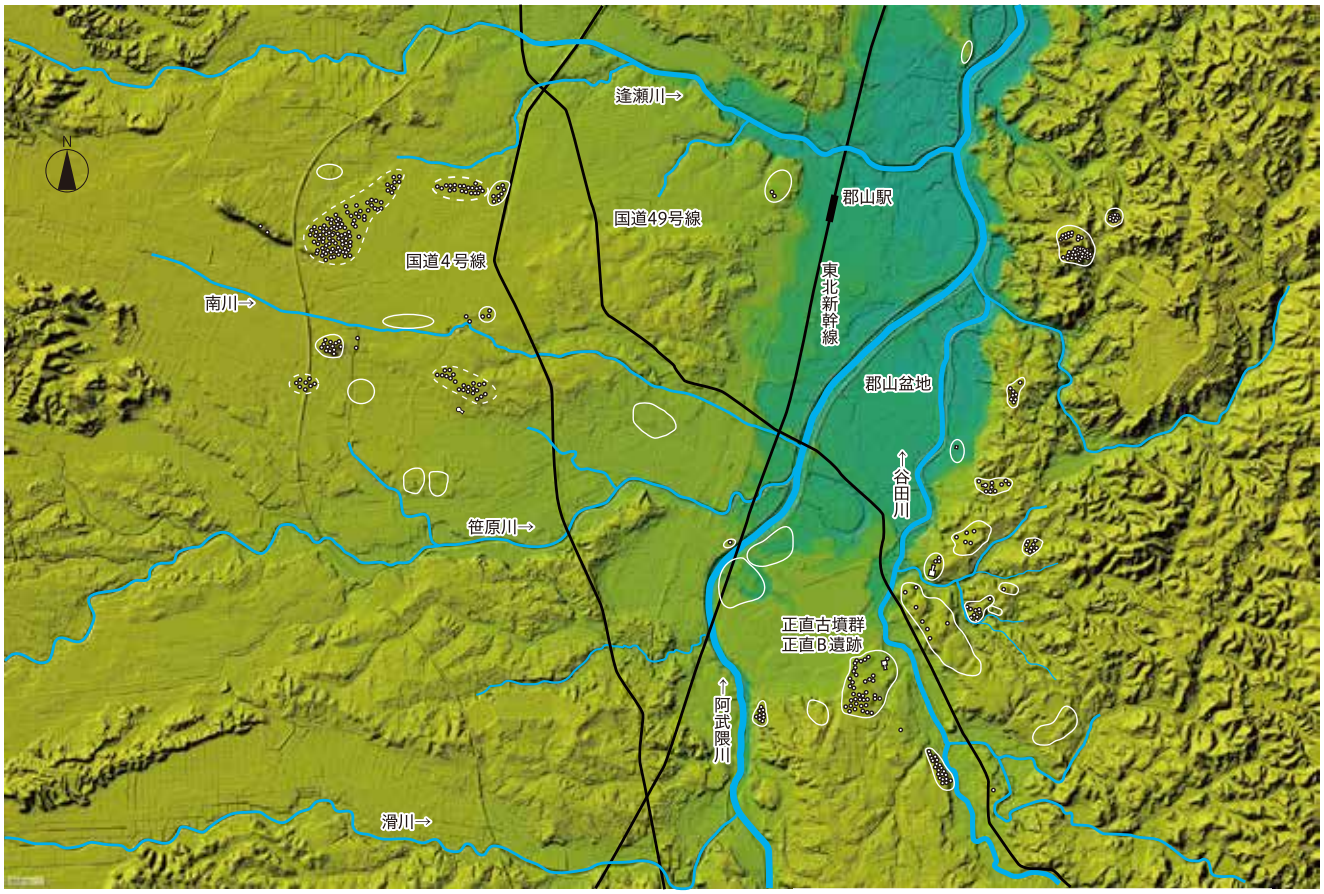
郡山市は、福島県のほぼ中央部に位置する。人口33万人余りを数える商・工業都市で、中心市街地は郡山盆地内にある。1924年に市制施行し、1964年の新産業都市、1986年のテクノポリス指定を経て、1997年4月1日からは中核市へ移行している。そして、2024年に市政施行100周年を迎える。

市街地のある郡山盆地は、安達郡大玉村・本宮市付近から須賀川市・白河市付近まで続く山間盆地の一部である。盆地内を南北に貫流する阿武隈川は、西の奥羽山脈から笹原川・逢瀬川・藤田川・五百川、東の阿武隈山地から谷田川・大滝根川・桜川などの支流を集めて盆地東縁部を北流している。東岸では南東部の阿武隈川と谷田川に挟まれた地域に段丘地形や沖積低地をみることができる。また、谷田川東岸の郡山市田村町大善寺以北では、阿武隈山地に続く丘陵が樹枝状に開析され、複雑な地形を形成している。

正直古墳群は、郡山市田村町正直に所在する。付近は郡山盆地の南東部にあたり、西側を阿武隈川が、東側を谷田川が流れ、北側には両河川によって形成された沖積低地が広がっている。古墳群は、両河川に挟まれた通称守山台地と呼ばれる砂礫台地の北端を占める正直B遺跡内に点在し、標高約240～250mの上～中位段丘面に築造されている。北側には沖積低地が広がり、東と西は沖積低地から入り込む開析谷に画されている。



正直古墳群の位置




0　4km

国土地理院ウェブサイト　地理院タイル「自分で作る色別標高図」と「陰影起伏図」を加工して作成

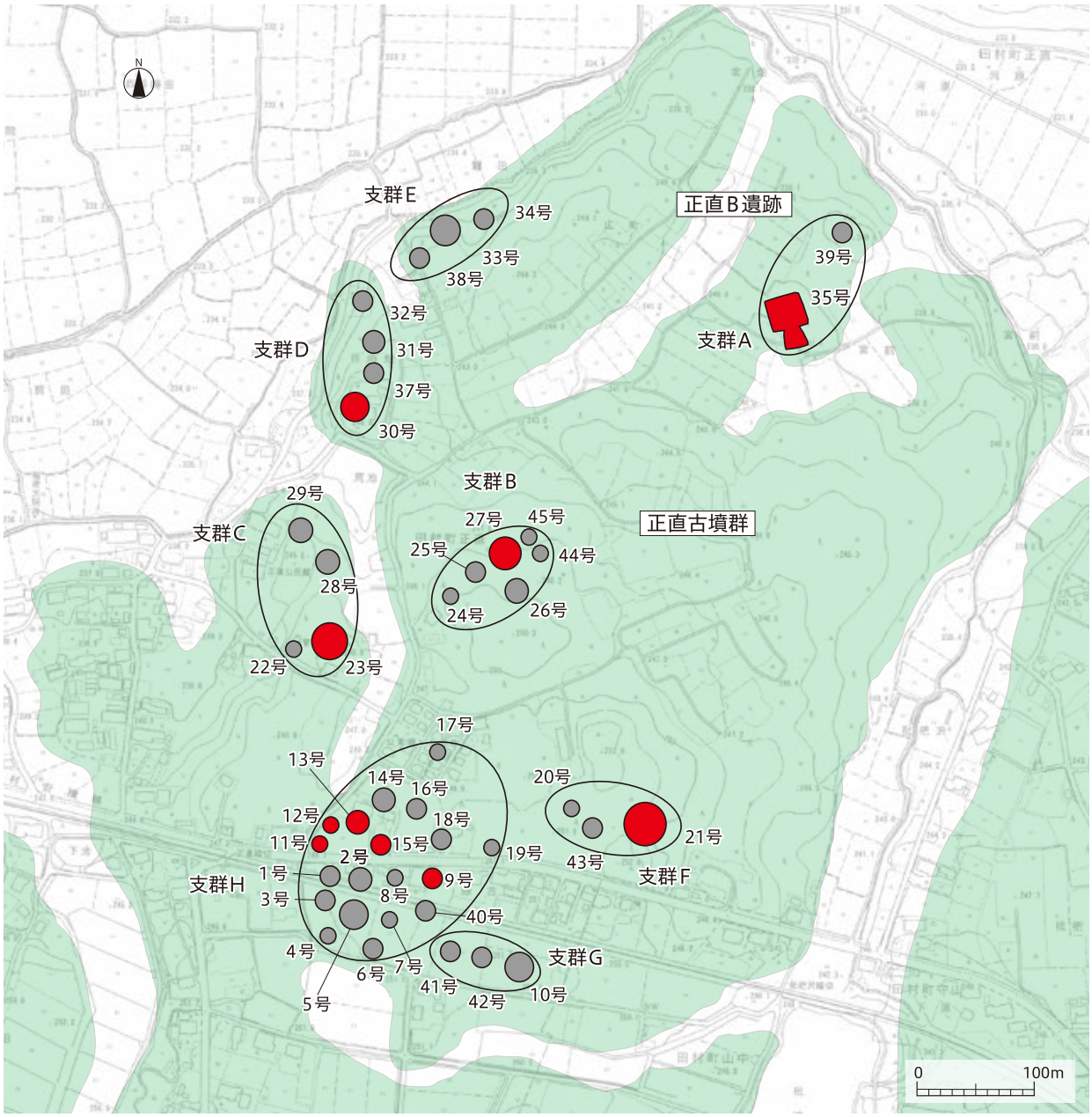
郡山盆地と古墳時代の主要遺跡分布

## （2）正直古墳群の群構成

古墳群は、当初30余基から構成されるものと考えられてきたが、古墳数はその後の調査により増加し、現在では45基を数えるまでとなった。確認された古墳の他にも、耕作時に破壊された古墳があったものと考えられ、往時は50基前後の古墳により形成されていたと思われる。

正直古墳群は、地形的なまとまりから尾根上に2～6基からなる支群A～Gと、群集する支群Hに分けられる。古墳時代前期後半（4世紀中～後葉）に築造された正直35号墳を端緒とし、5世紀代を通して築造された。なかでも大型の古墳からは、鉄製品や石製模造品が多数出土していることが特徴的である。

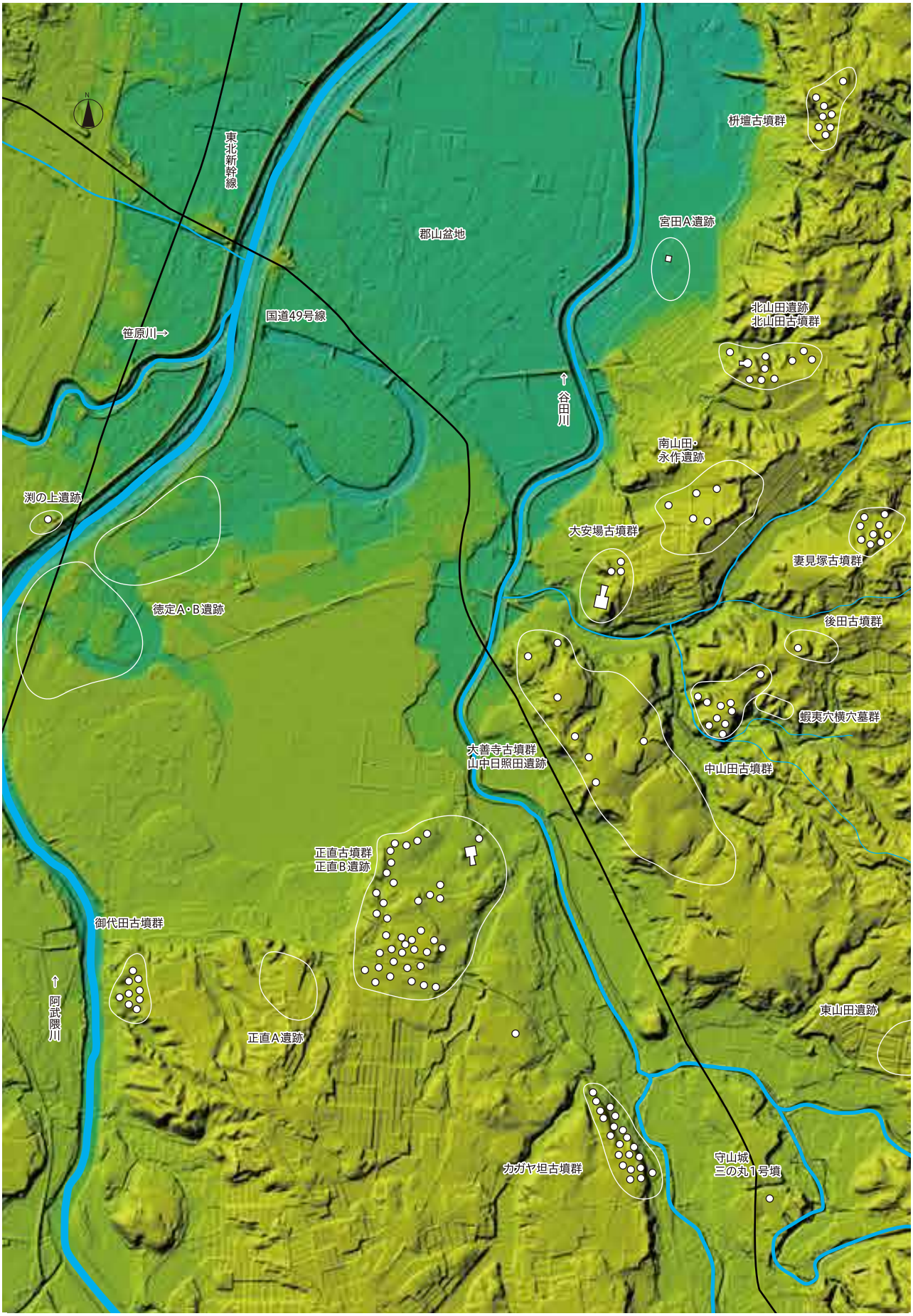
これまで、本格的な発掘調査が行われた古墳は11～13・15・21・23・27・30・35号墳などである。また、確認調査や試掘調査などを含めると、半数近い古墳に何らかの調査の手が加えられてきた。そして、古墳群の内容が分かるにつれて、東北地方でも類例の少ない古墳時代中期の古墳群としてその重要性が増し、さらに、古墳時代前期から中期に継続する希少な古墳群という評価もされるようになった。




本格的な調査が行われた古墳

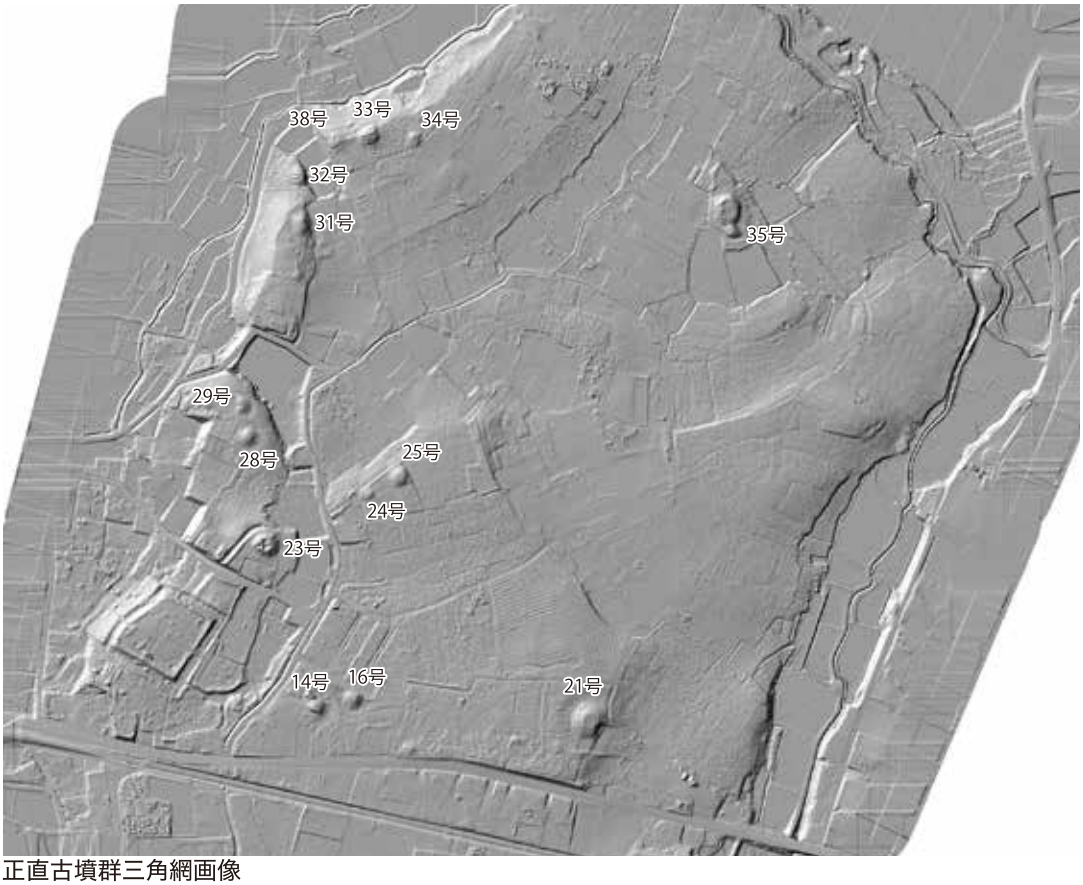
古墳

正直古墳群の群構成




郡山東部の古墳時代主要遺跡分布

正直古墳群全景（上方北）




正直古墳群三角網画像

# Ⅱ 4世紀の古墳

## (1)正直35号墳

### a)前方後方形の古墳

35号墳は、古墳群北東端の支群Aに位置する。当初は中期の前方後円墳と考えられていたが、前方後方墳ではないかとの指摘があり、1990年に測量調査が行われた。その結果、全長37mの前方後方墳であることが明らかとなった。

墳丘の正確な形態・規模、そして築造時期を把握するため、2019年に発掘調査がはじまった。立木の伐採でそれまで明瞭ではなかった古墳の姿が明らかになると、前方部と後方部の高低差が少なく、規模のわりに後方部墳頂平坦面が広いことが明らかとなる。後方部上にはかつて神社があり、その造営のために後方部はかなり削られ、その際に生じた土砂が後方部東側に厚く堆積していた。

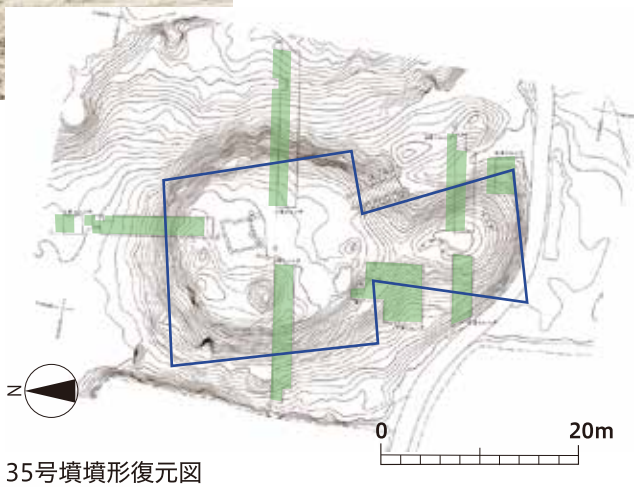
35号墳全景(南より)

35号墳第6トレンチ(南東より)

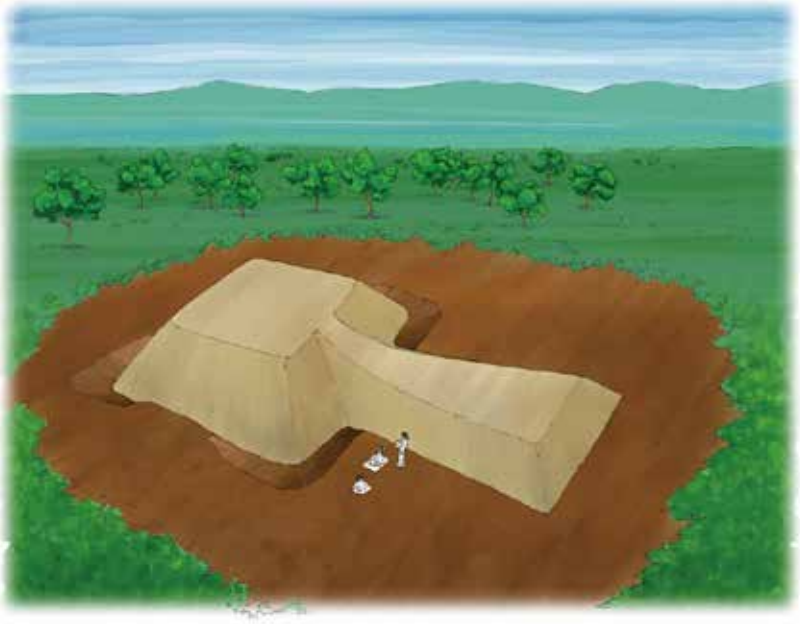
### b）古墳群形成の端緒となる古墳

35号墳からは、いくつかの土器が出土した。くびれ部より出土した土器は、底部が穿孔され口縁部が直線的に立ち上がる底部穿孔壺である。また、口縁部が二重になる底部穿孔壺も出土した。こうした土器の年代から、35号墳は4世紀中～後葉の築造であることが明らかとなり、正直古墳群で最初に築造された古墳であることが分かったのである。

35号墳全景（上方東）




35号墳墳形復元図



35号墳想像イラスト

## (2)正直21号墳

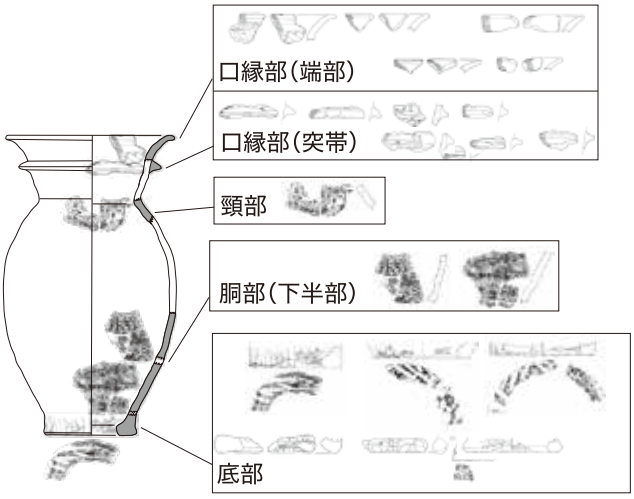
### a)古墳群中最大の円墳

21号墳は、古墳群南東側の支群Fに位置する直径37mの円墳である。古墳群が徐々に開発行為を受ける中、古墳の保護が急務となるとともに古墳群を保存する機運が高まり、史跡整備を目的とした学術調査が2017年から実施されることとなった。

21号墳は、それまで方墳ではないかとの指摘もあったが、調査により弧を描く周溝が確認され、円墳であることが確実となった。

21号墳全景(南東より)

21号墳墳丘南側削平部1号溝遺物出土状態




21号墳出土遺物

### b）空白期の古墳

墳頂部を調査した結果、埋葬施設の痕跡が並んで確認された。木棺が2基並列していたと推測できる。周溝からは、墳頂部に樹立されていたと考えられる壺形埴輪の破片などが数多く出土している。

壺形埴輪は、口縁部の中ほどに突帯をめぐらせるものと、口縁部外面に粘土紐を貼り付けた二重口縁を呈するものであることが分かった。壺形土器の形態的特徴から、4世紀末から5世紀初頭に築造された可能性が高まった。

また墳丘を区画する溝から出土した小型壺も同様の年代が想定された。前述した35号墳は前期後半、後述する27号墳は中期中葉前後と考えられており、21号墳は35号墳と27号墳との間に位置づけられることとなる。これまで不明であった古墳群の年代的空白を埋める重要な古墳であることが明らかとなった。

21号墳全景（上方西）

# Ⅲ 5世紀前半の古墳

## (1)正直27号墳

### a)発見された二つの石棺

27号墳は、1970年の緊急調査によって、墳丘は直径26m・高さ2mの円墳で、幅2m・深さ1mの周溝が確認された。12月16日から21日という短期間の調査であったため、墳丘構築方法の解明には至らなかった。

発見された二つの石棺は、南北に並列するように見つかる。それぞれ「南箱式石棺」と「北箱式石棺」とされた。

1970年の調査の際、担当者が最初に受けた印象は、「鏡などがなく、簡素な東北を感じさせる遺物だけ」というものだった。しかし、副葬されていた遺物は、その後の調査により、東北地方における古墳時代中期(4世紀末～5世紀)の古墳では類をみないほどの質と量を誇るものであることが明らかとなっていく。

27号墳埋葬施設全景(東より)

27号墳南箱式石棺(東より)

27号墳調査風景(南東より)

### b）南箱式石棺

墳丘中央から南寄りに位置する南箱式石棺は、内側中央部で259×49cm、床面からの高さは55cmである。石棺に使用された石は、加工しやすい安山岩質溶結凝灰岩である。床面は礫敷で、遺物をとり上げたあとに礫を掘り下げると、扁平な河原石が敷き詰められていた。

この南箱式石棺には人骨が残っていなかった。日本の土壌は酸性土のため、流入した土砂に埋もれた人骨は、残らなかった可能性が高い。

石棺内部からは、鉄鏃20点や刀子1点とともに石製模造品が多数出土した。その数は、刀子形6点・斧形1点・剣形19点・有孔円板24点である。

27号墳南箱式石棺南西隅遺物出土状態

27号墳南箱式石棺北西隅遺物出土状態

27号墳南箱式石棺全景（東より）

### c）北箱式石棺

27号墳の北箱式石棺は未開封であった。蓋石は最大2mにもなる板石を何枚も用い、その長軸は4.5mにもおよび、一般的な箱式石棺の蓋にくらべ長大であった。蓋石を移動させていくと、中央部で板石により仕切られていた。そのため、この仕切り石の西側を「西側区画」、東側を「東側区画」とした。

石棺の側壁は板石を縦長に立て並べられていた。先に調査した南箱式石棺の側壁は横長に板石を用いており、明らかに異なる構造である。石棺の内部は全面が真っ赤に塗られていた。板石の隙間は粘土で目張りされ、その目張り粘土までていねいに赤彩されている。東西の両区画ともに土砂の流入はなく、人骨・遺物の遺存状態は良好であった。

27号墳北箱式石棺検出状況（南東より）

27号墳北箱式石棺蓋石除去後（西より）

### d）北箱式石棺東側区画

東側区画は、内側の中央部で208×45㎝を測り、短辺は若干東側の幅が広い。床面には礫が敷き詰められ、頭を東に向けた人骨が一体確認された。頭を東に向けて、体はあおむけで、頭部・腰骨・脛骨などが草根状のもので覆われていた。

27号墳北箱式石棺東側区画

27号墳北箱式石棺東側区画（西より）

27号墳北箱式石棺東側区画

### e）北箱式石棺西側区画

北箱式石棺の西側区画は、内側中央部235×51㎝で、床面には東側区画と同様に礫が敷き詰められていた。南側に一体、北側に一体の人骨が、どちらも頭を東に向けて葬られていた。

仕切り石から25㎝離れた人骨の頭部と思われる付近から、石製模造品がまとまって出土した。また、鉄剣2点と、それにともなう鹿角製刀剣装具などが出土している。

27号墳北箱式石棺西側区画（北西より）

27号墳北箱式石棺西側区画（上方南）

### f）周溝および壺棺の調査

1970年の調査は緊急調査であったため、調査の中心は埋葬施設であったが、2023年の調査では、周溝部分と周辺の調査が実施された。27号墳の西側では、周溝に沿って壺棺が見つかった。大型の壺が横向きにされ、口縁部は、外側から別の土器により塞がれていた。

27号墳全景（南より）

壺棺（南より）

### g）埋葬時の様子

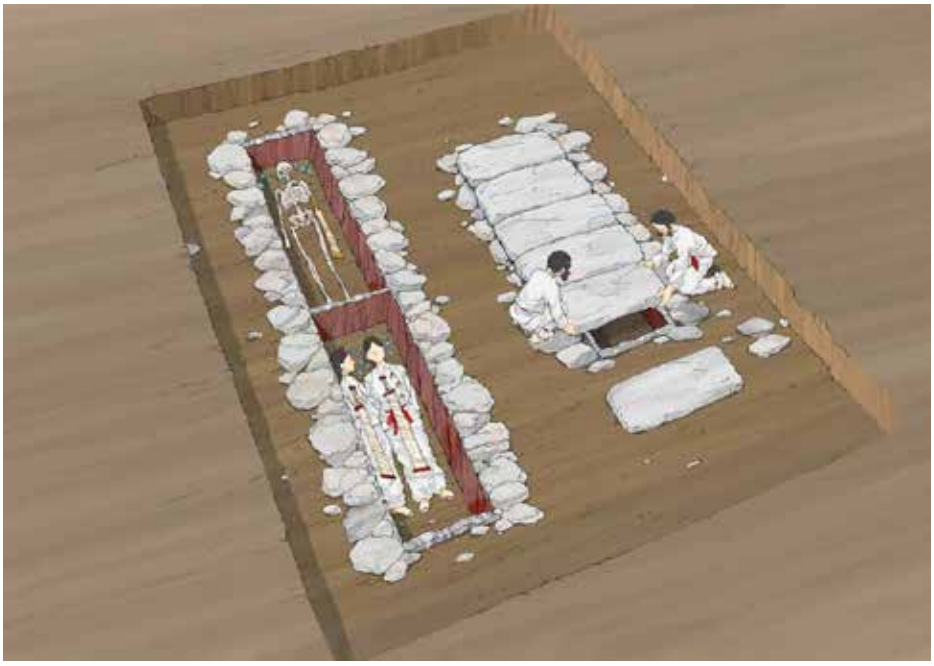
27号墳は、二つの箱式石棺に、4人の人物が埋葬されていることが明らかとなった。その一方で、新たな謎も生まれた。これらの人物の埋葬された時期が同じか異なるかという問題である。

古墳の中心を基点として平行に並んだ南北両箱式石棺の位置関係からは、4人はほぼ同じときに埋葬されたと思われる。近親者であろうが、どのような親族関係であったのだろうか。

北箱式石棺の人骨の頭蓋骨には水銀朱が付着しているが、これは骨化が進んだ状態で塗られたとも考えられる。とすれば、死後すぐには古墳に葬られず埋葬までに一定期間の儀礼（殯（もがり））が行われたため、骨化が進んだことも想定できる。

発掘調査以降もつづけられる分析の進展により、新たな謎、解明すべき問題も生じている。

**復元イラスト1**
4人がほぼ同じ時期に死亡し埋葬されたと考える復元イラスト



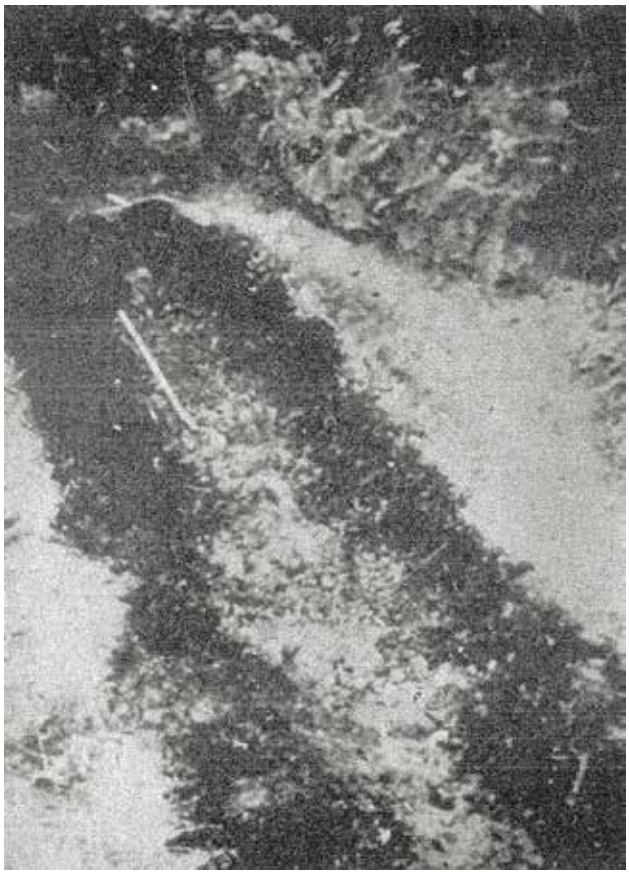
**復元イラスト2**
4人が異なる時期に死亡したと考える復元イラスト

# Ⅳ 5世紀後半の古墳（1）

## （1）正直23号墳

23号墳は、直径29m・高さ5mの円墳で、1949年に福島県学生考古学会が発掘調査を行った。古墳は、古墳群の西寄りに位置し、他の支群とは開析谷で画された狭い丘陵上にあり、22・23・28・29号墳により構成される。

古墳の埋葬施設は2基確認されている。一つは木棺の外側を木炭で固定した木炭槨で、もう一つは詳細は不明だが木棺の外側を粘土で固定した粘土槨のようである。木炭槨からは竪櫛、線刻表現のある刀子形石製模造品6点が出土した。



23号墳埋葬施設
「2　木炭槨　田村郡守山町正直」
福島県教育委員会1952『福島県発見の埋蔵文化財図録』より転載

23号墳埋葬施設復元イラスト

## （2）正直30号墳

### a）木棺直葬の埋葬施設

30号墳は、全長22.5mで、調査前の観察では墳端が直線的であることから方墳の可能性があるとされた。しかし、削平による改変を受けた可能性が高いことから、円墳と考えた方が妥当であろう。

木棺直葬の埋葬施設2基が、2棺並列の状態で確認された。このうちの第1埋葬施設からは刀子形4点・剣形1点・有孔円板4点などの石製模模造品、臼玉（うすだま）・管玉（くだたま）・琥珀（こはく）玉が発見された。刀子形は、一般的には方形突出部にある紐通し孔が把部にあって、通常とは異なる形態である。第2埋葬施設からは、鉄刀子、臼玉・ガラス玉・管玉・瑪瑙（めのう）の勾玉などが出土した。

30号墳全景

30号墳埋葬施設検出状態

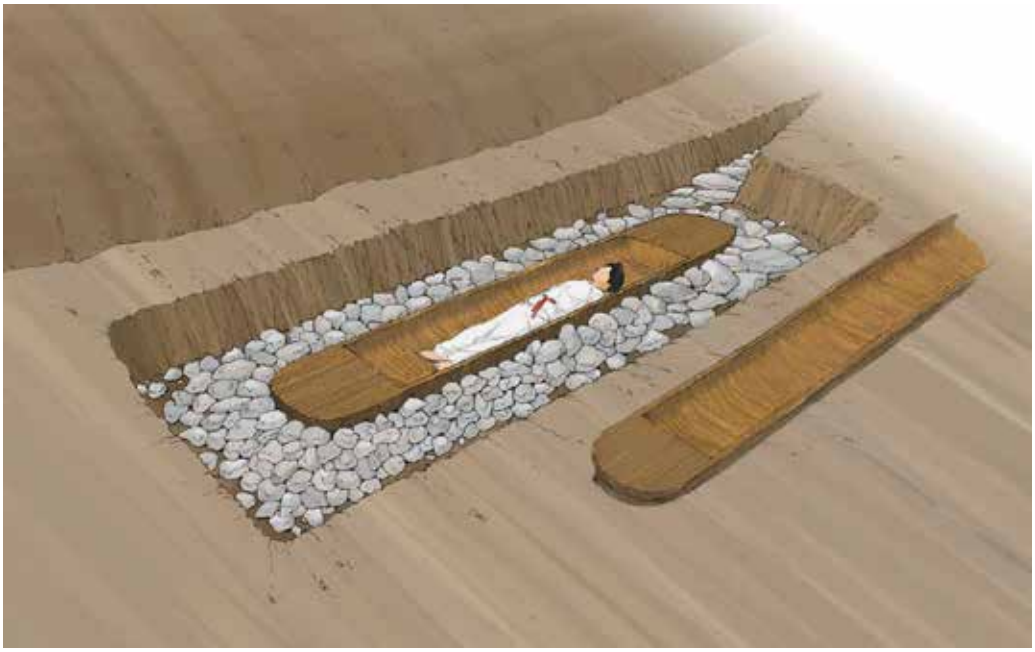
30号墳第1埋葬施設復元イラスト

### b）墳丘外埋葬施設

30号墳の墳丘外からは排水施設のある埋葬施設が確認された。この埋葬施設は、礫により、中央に据えた木棺を固定するものだが、上部まで立ち上がらず棺の下にも礫がない。短軸断面形はゆるやかに湾曲し、長軸断面形は端部がゆるやかに立ち上がり、舟底状を呈する。広い意味では礫槨と呼べるだろう。埋葬施設の内部からは剣形3点・有孔円板5点の石製模造品が出土した。

30号墳墳丘外埋葬施設全景（南より）

30号墳墳丘外埋葬施設全景（北より）



30号墳墳丘外埋葬施設復元イラスト

# V 5世紀後半の古墳(2)

正直古墳群の南西部にある支群Hでは、小規模円墳が密集する。これまでに11・12・13・15号墳の調査が行われている。30号墳や23号墳とほぼ同じ時期と考えられるが、それらとは異なるあり方の支群である。

## (1)正直11号墳

11号墳は、12号墳・13号墳とともに1976年に発掘調査が行われた。直径約9.5m・高さ0.8mほどの円墳で、墳頂部はかなり削平されていた。

墳頂部の表土下約20㎝のところから、側壁の石と敷きつめられた底石が見つかり埋葬施設は箱式石棺であることが判明した。また、石棺の南側の盗掘坑の南東へりに板状の石が据えられた状態で4枚確認された。盗掘により破壊されているものの、南北に隣り合うように箱式石棺が2基あったことが分かる。

周溝の底面直上で壺形土器が直立した状態のまま、白色砂粒層の下で見つかった。この白色砂粒層は、群馬県榛名山降下軽石・FP(群馬県の榛名山が1500年前に噴火した際の火山灰)で、周溝に土砂が堆積する過程で堆積したと思われる。壺の形態と合わせて11号墳の年代は、5世紀第3四半期ごろと考えられる。また、壺は直立で出土していることから、墳丘からの転落ではなく、周溝に置かれた可能性がある。

11号墳土層堆積状況(南より)

11号墳第1埋葬施設(北より)

11号墳周溝土層堆積状態(南より)

## (2)正直12号墳

12号墳は、11号墳と13号墳の間に築かれた古墳で、直径約9.5m・高さ0.4～0.5mほどの円墳である。調査が実施される段階でかなり削平されており、墳丘を掘り下げても埋葬施設は確認できなかった。一方、周溝では11号墳と同じように白色砂粒層(FP)の堆積が確認された。

周溝の底面からは1mほどの間隔で高坏が出土した。墳丘から転落したものではなく、周溝に置かれた可能性がある。この高坏は特徴的な形態で、椀形の坏部の口縁には段が形成されており、須恵器の影響を受けていることが分かる。また裾部に向かってゆるやかに広がる脚部は須恵器の短脚高坏に近い形態である。こうした土器の特徴や火山灰の堆積から、12号墳は5世紀第4四半期ごろに築造されたと考えられる。

12号墳周溝土層堆積状況

12号墳土層堆積状況

12号墳遺物出土状態

12号墳土層堆積状況

12号墳周溝遺物出土状態

## (3)正直13号墳

13号墳は、11～13号墳のなかでもっとも規模が大きい円墳で、直径20m・高さ2mである。墳頂部下約140cmのところから、ゆるやかな舟底形をした木炭層が見つかり、埋葬施設と確認した。木炭の残存状態と形態から、木炭槨ではなく木棺の痕跡である可能性が高い。

埋葬施設からは鉄鏃が、周溝からは石製模造品の有孔円板2点が出土した。鉄鏃は片側に刃が付いた長頸鏃が多数を占めることから、5世紀末から6世紀初頭の築造と考えている。

また、13号墳の墳丘をローム層まで掘り下げたところ、円形を呈する3基のピットを検出し、そのうちの1基から完形の壺形土器が1点出土した。こうした古墳構築直前に埋納された土器の性格は不明であったが、後に実施した15号墳の調査によって祭祀に使用されたものということが明らかとなった。

13号墳墳丘土層堆積状況

13号墳埋葬施設鉄鏃出土状態(西より)

13号墳周溝土層堆積状況(南より)

13号墳埋葬施設(東より)

## （4）正直15号墳

15号墳は、1995年に発掘調査が行われた。直径17m・高さ1.8mの円墳で、埋葬施設は確認されていない。周溝などから石製模造品の剣形1点・有孔円板4点とともに土器が出土し、5世紀後半の築造と考えられる。なお、旧表土上面から有孔円板4点とともに、土器が出土している。古墳の周囲に竪穴建物などは確認されていないことから、古墳築造直前に行われた祭祀であると判断される。

15号墳の調査時に、15号墳と8・9号墳の間、18号墳の間に木棺直葬と考えられる土坑墓を3基確認した。このうち3号土坑墓から曲刃鎌が出土しているが、時期を特定できる資料はなく、明確な年代は不明である。ただ、土坑墓は古墳の間に位置することから、古墳築造と同時期か直後の5世紀後半と考えられる。

土坑墓には、副葬品がない場合が多く、墳丘の有無からも古墳の被葬者とは明らかな階層差がみられる。一方、土坑墓自体の検出事例は多くはなく、古墳に隣接する墓域に立地することから、土坑墓の被葬者は古墳の被葬者と何らかの関係があったと考えるべきであろう。

15号墳全景（北より）

15号墳周溝遺物出土状態（西より）

1号土坑墓全景（東より）

## (5)正直B遺跡・正直A遺跡

### a)正直B遺跡

支群A～Gのうち35・21・27号墳は、4世紀中～後葉から5世紀前半が築造時期と考えられる。そして丘陵北端の正直B遺跡は、5世紀前半の土器とともに精巧なつくりの剣形石製模造品などが出土し、5世紀前半を中心とする集落と確認されている。この正直B遺跡が27号墳などの築造母体となった集落と考えられる。

正直B遺跡出土遺物(福島県文化財センター白河館所蔵)

### b)正直A遺跡

支群Hは、5世紀後半の15・13号墳あるいは9号墳などがあり、関連する同時期の集落は、古墳群の西側に位置する正直A遺跡である。両者から出土する剣形・有孔円板の石製模造品、臼玉の共通性からみて、正直A遺跡の石製模造品工房で製作されたものが副葬された蓋然性が高い。なお、正直A遺跡では、集落内で行われた祭祀跡などが確認されている。

正直A遺跡52a号住居出土遺物(福島県文化財センター白河館所蔵)

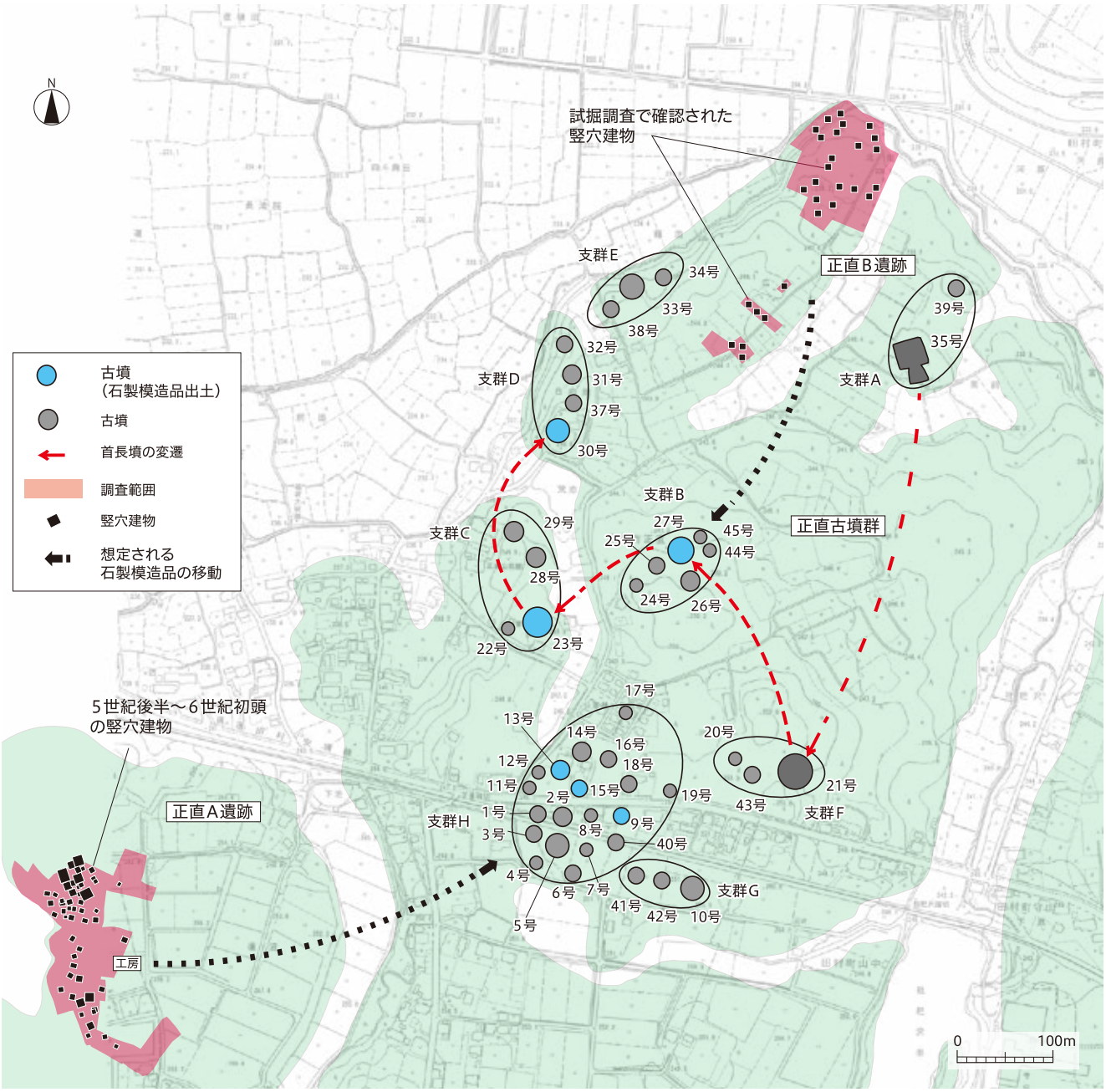
正直A遺跡1号祭祀復元イラスト

# VI　正直古墳群の意義

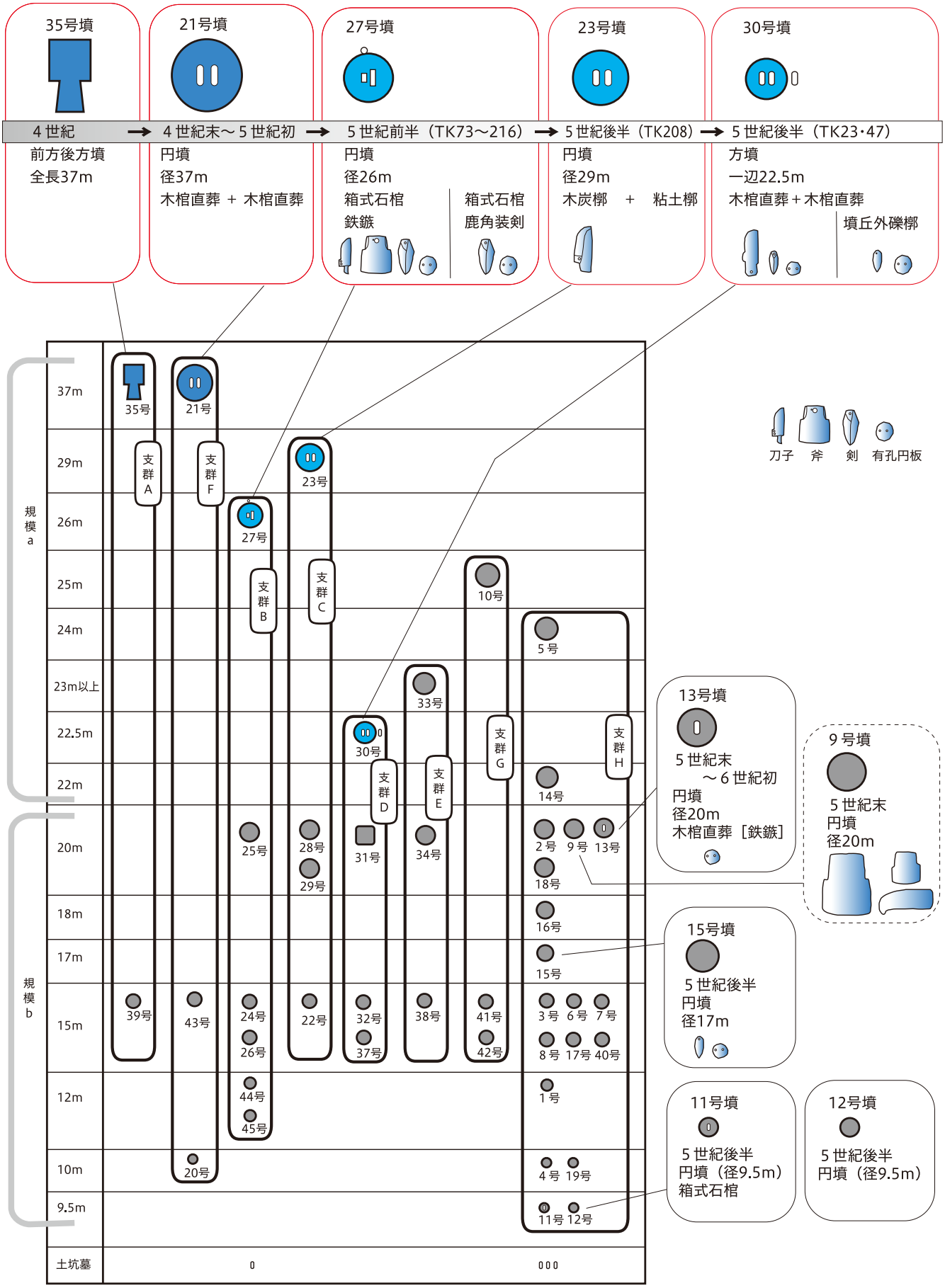
## (1)正直古墳群の群構成と首長墳の変遷

正直古墳群では、石製模造品を使用した葬送儀礼が継続的に行われた。そのうち、刀子形が使用されたのは、27号・23号・30号墳といった支群中最大の古墳に限定されており、それらの古墳は小首長墓あるいはそれに準じる古墳と考えられる。

古墳群では、4世紀中～後葉の35号墳にはじまり、4世紀末～5世紀初頭の21号墳、5世紀前半の27号墳、さらに5世紀後半の23号墳、30号墳が築造される。これらの古墳は墳形・規模・出土遺物の特徴から、一般的には小規模首長墳として把握される。正直古墳群では小規模ながら継続して首長墳が築造されていることは、東北地方南部における5世紀前葉の大型古墳の空白を考えるうえで重要である。下位首長層は継続するが、上位首長層がいないということは、より広い範囲を対象として政治的要因を考えなければならないからだ。




正直古墳群における首長墳の変遷



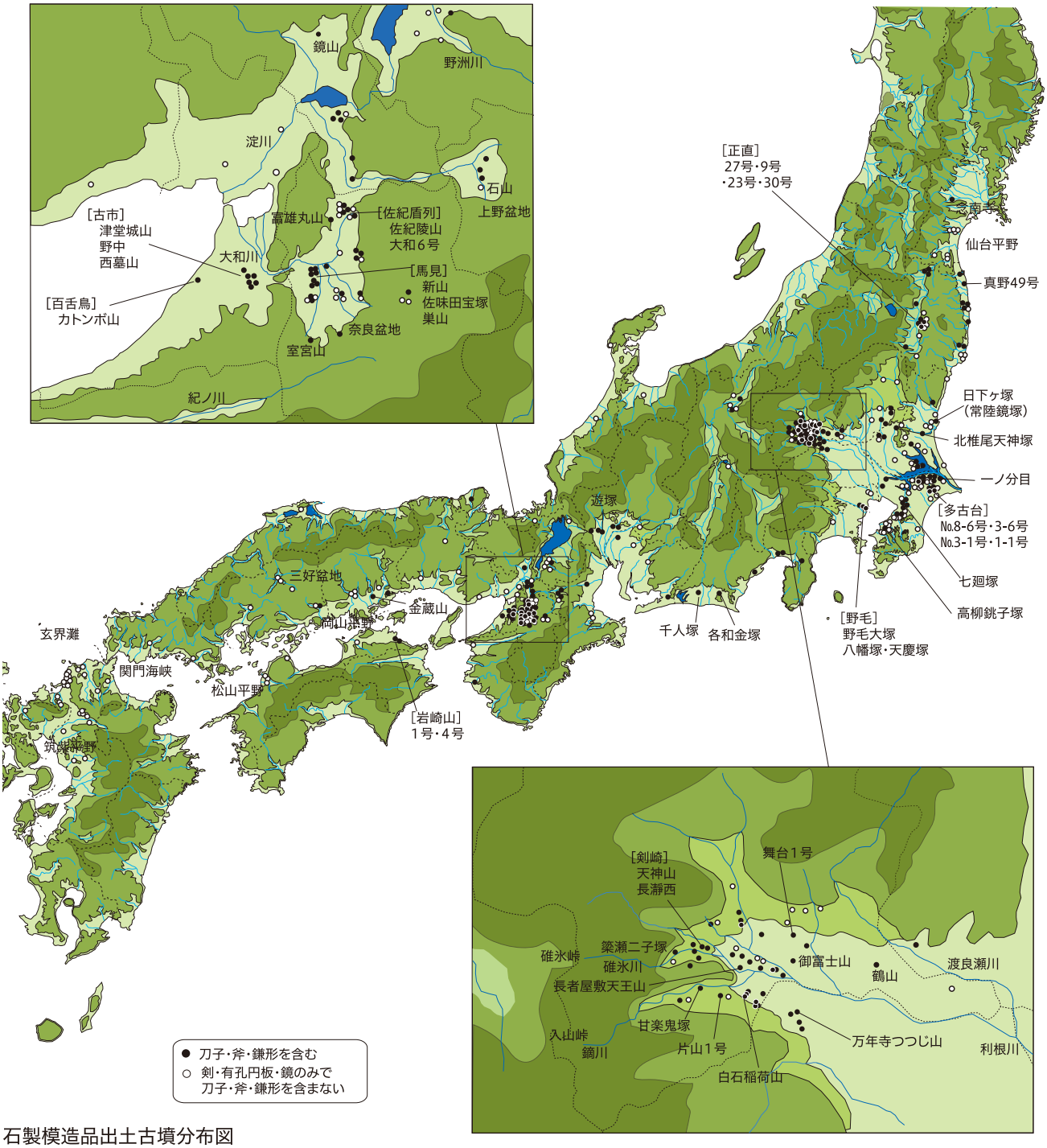

正直古墳群における古墳構成図

## （2）正直古墳群の意義

正直古墳群は、東北地方における大型古墳の空白期とされる5世紀前葉も含め、4世紀中～5世紀末まで継続して古墳が築かれた、当地域においては稀有な事例である。大型前方後円墳などはなく、目立つ古墳群とは決して言えない。しかし、首長あるいはその近親者は、箱式石棺や木棺、棺を覆う礫槨・木炭槨、壺棺・土杭墓などさまざまな形態で埋葬されている。

そして、27号墳には新たな葬送儀礼の道具である石製模造品が副葬された。石製模造品は刀子形や斧形とともに、他の地域の古墳に先んじるように、剣形や有孔円板も副葬するなど独自性がみてとれる。そして、次代の首長たちは、一度とり入れた石製模造品を使用する葬送儀礼を継続していった。

こうした特徴的なあり方は、ヤマト王権が創出した儀礼をとり入れながらも、独自性を発現しようとしたこの地の首長層の姿を表すものと言えるかも知れない。




石製模造品出土古墳分布図

## 【正直古墳群をさらに詳しく知るための文献】

『石製模造品による葬送と祭祀　正直古墳群』
シリーズ遺跡を学ぶ161　新泉社
2023年　佐久間正明

・・・古墳時代中期を代表する遺物の一つである石製模造品を中心に、東北地方南部における葬送と祭祀を概観する。正直古墳群における葬送の様子を中心に、同時代の集落・清水内遺跡、東日本有数の祭祀遺跡・建鉾山祭祀遺跡の様相をまとめる概説書。
（受付で販売中）

## 【協力機関・協力者】

福島県立博物館　福島県文化財センター白河館
鶴見俊平　平澤慎